
普遍の影 4

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普遍の影 4

【Nコード】

N0664I

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

これは僕と幽霊級に影の薄い薫（今回登場せず）とぶちギレ暴力女こと高藤の文化祭なお話である。異端の影と普遍の影1、2、3を読まないといけない出来損ないなお話である。

「調理？　僕が？」

文化祭の前日、店になる教室の内装を整えている際に垣内さん：
：　だったかな？　前に薫と話しているのを見たことがある気がする。
　　が僕に言って来た。

「うん　三島っち、家庭科の調理実習のときスゴい手際いいじゃん？
　　だからさあ」

「正直いやなんだけど」

「おお　直球……流石三島っち」

「だいたい前に決めてた女子の調理組は？」

「いやあ　面目ないことにあたし以外誰もまともに包丁握ったこと
　　なかったんだよねえ……」

垣内さんは苦笑して頬を掻いた。

昨今の女子はまあそんなものかと僕は適当に納得して……
あれ？　井上さんとか実習のときにはちゃんとやってたような……

なんとなく、ここでまあいいかと投げ出してしまえるかどうかが
どうもこの文化祭をどう過ごすかの転機な気がする。

「……まあいいか」

たまには僕だって、ねえ？

内装が出来上がった。

全体的に白っぽいイメージで簡単な装飾をしてあり前にある黒板には大きな字でメニューが、ちなみにクセのある丸文字のため僕には解読し辛い。

窓とドアには黒い幕を張って覗き見を防止している。金を払わずに眺めるだけ眺めて帰る客予防だろう。しっかりしてるなあ。

「じゃあいまからリハーサルやるよお」

と、垣内さんがその場に居る女子全員に呼び掛けて男子を教室の外に追いやった。なぜか僕だけが残される。

ってか、リハーサル？

「三島っち、ちょっとそこ立っててもらっていい？」

「？ うん」

「はい 並んで並んでー」

手際よくみんなを纏める垣内さん。僕や薫なんかよりよっぽど学級委員が似合うんじゃないだろうか。

「よしじゃあ1人目試してみよお！」

先頭の女の子が、

「い…いらっしやいませ ご主人様っ！」

ペコリと頭を下げた。

……リハーサルってそういうことか。

「あの…垣内さん？」

「なに？ 三島っち」

「なんで…僕？」

いや、うん 僕も男だからね。なんていうか、くるものはあるよ？ 役得だとは思うんだけど、僕はその先にあるキラート（たかとう） 細胞の恐怖とも戦わないといけないんですよ…

「三島っちふつうにイケメソだし」

なるべく普通っぽい様子を装ったらしいけど垣内さんの声は少し上擦っていた。気付かないフリ。

「羞恥心の克服には三島っちぐらいの見た目はいるかなあ、と」

男子でアイスクリームのほう入れたの三島っちだけだし、付け足して垣内さんはまた苦笑して頬を掻く。溜め息を吐きたくなったけど失礼かなあと思って飲み下すことにした。

「遮ってごめん 続けて」

直立不動って言うのはちょっと辛い物があるよなあ…… なんて

思考を軽くどこかへ飛ばしてみた。

そして、その時が来た。Judgement Day、とかタイトルつけたい気分だ。

列の最後尾に並んでいた、高藤 美咲が僕から3歩ほど離れた位置に壁なく直立していた。

ちなみに今井は買い出し班なのでここにはいない。

高藤、右手と右足を同時に踏み出して僕の前へ。緊張からか頬を紅潮させている。

「い……いいいい……いらっ……いらっ……いらっ」

繋げたら「いらいら」だなあ

……それはともかくとして高藤は少し目を伏せている。頬の紅潮は益々広がって首まで真っ赤になって行く。

「いっ……いっ……いらっしゃいま、せっ ごごご……ごすじっ」

声の途切れ方が不自然だった。どうやら舌を噛んだらしい。

可笑しいけど、別に誰も笑わない。似たような羞恥心は既に女子の誰もが体験してるんだし、やりたがらない高藤を提案者だからと無理矢理引き込んだ責任感もあるんだろう。高藤がふざけてやってるんじゃないことはわかり切ってるしね。彼女はそんなに器用じゃない。

高藤は一度、上目遣いの涙目で僕を睨んだ。僕は嫌みじゃない程

度に微笑んでみた。

とたんに彼女はキツ　と目の端を吊り上げると

「いらっしやいませ　ご主人様っ！」

めっちゃ大声で怒鳴ったのだった。

「あ　そうだ、三島っち

調理のメンバーさ　1から組み直すみたいなんだけどこの際だから三島っちが決めてくれない？

あ、あたしは調理のままでもいいから」

「へ………？」

「じゃ、あたし帰るからよろしくう」

颯爽、っていう言葉が似合うくらいあっさりと、小走りで先に行っていた女子グループのほうへ垣内さんは駆けて行った。

えーっと……、この学校の文化祭は午前、午後で別れていてうちのクラスは午後だけ店を開ける。だから調理のメンバーは4人と少ないんだけど。

僕と垣内さんと……

「「……………」」

教室に残された高藤。……………不可抗力、だよな？

「高藤、ひまなときだけでいいから手伝って貰える？」

「ッ……」

睨まれて、蹴られた。ころなしかいつもより力が弱い気がする。それから、長い沈黙を置いてから小声で「いいよ」と僕に顔を向けずに言った。

ガラッ ドアが開いた。僕と高藤は反射的にそちらを見ると、北川が居た。

「あっちゃー……遅かったか」

後ろ髪を搔く。買い出し班の北川は多分女子の“リハーサル”を見に来るつもりだったんだろう。

「北川、丁度よかった」

「ん？ なんだよ、ひでりん」

……ああ、そうだ。北川は僕のことを“ひでりん”と呼ぶ。僕の名前の“太陽”と自然現象の“日照り”から来てるんだろうけど正直そのセンスはよくわからない。

「人が足りてないんだ 調理手伝ってくれ」

「やだよめんどくさい」

北川が身を翻して教室を出ようとして、

「多分一番間近でメイド服の女子見れる位置
喜んでやらせて戴きます、三島様」

……僕に飛び付いてきましたとき。

(後書き)

あらすじ って大事だなあと最近書いててたまに思う

“小説を読む”からページを開いた段階である情報は『タイトル、ジャンル、作者名、文字数、あらすじ』しかないわけでその中で具体的な情報は“作者名”と“あらすじ”のみ

んで作者名は知ってる人なら意味があるけど初見の人には全く無意味な情報

となると内容よりむしろ読者が小説を開くまではあらすじが勝負と言えるんじゃないだろうか？

内容を軽視してるわけじゃないが、どんな傑作も読んで貰わないと傑作たりえない訳です ハイ

……あと“ゝを先に読んでください”ってぶっちゃけめんどいよねえ 短編読みにきたのに長編読むかっての (笑)

異端の影とかわざわざ目通すかよww

正直書いたら読者数減らすだけー

さーせん…………orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0664i/>

普遍の影 4

2010年11月24日09時24分発行